

生徒がいきいきし、力のつく授業を目指して

木村 孝

1. はじめに

生徒がいきいきと授業を受け、自学自習も積極的に意欲的にするようになるには、どのような授業をどのように展開していけばよいか、というのは、英語を教えている者にとって真剣に取り組むべき課題であります。本稿では、その課題解決に向けて私が今までに実践してきたいくつかを紹介しながら共に考察していければと考えております。

2. 実際の授業の中で 【その1】

コミュニケーション英語と英語表現の授業を関連させ、相乗効果を生み出すためには、両方の指導の中に4技能(読む, 聞く, 話す, 書く)をできるだけバランスよく取り込むことを意識して授業プランを立てることが重要です。また、そのことは、それらの授業がお互い関連したものであり、全く異質のものを学んでいるわけではないと生徒に認識させるためにも大切だと考えております。

例えば、ライティングをコミュニケーション英語に組み込むことを考えてみましょう。授業で扱う文法事項やイディオムなどの指導の際に、それらを活用した英文とその日本語訳を前もって教師が作成しておきます。そして授業では、生徒に日本語訳を示して英文に直すように指示します。その活動において、生徒は decision making のプロセスを授業中に体験することができます。

以下の英文で例を示します。なお、この英文は *POLESTAR English Communication I* p.94 からの引用です。

The Kimberley Process began in 2003. Its purpose was to get rid of the trade in "blood diamonds." There were wars in Angola, Sierra Leone, and Liberia, and armed groups were earning money from the illegal diamond trade to continue the wars. (下線・斜体は筆者による)

コミュニケーション英語の授業では、こういった英文を素材に文構造、意味内容、文法、表現などを確認していると思います。私の授業ではそれだけで終わらせないために、ポイントとなる表現を含んだ英文を用意しておきます。例えば get rid of という表現を含んだ以下の英文を見てください。

The people living in that region will not get rid of the local tradition which has been passed down from generation to generation because they respect their predecessors' way of living from the bottom of their hearts.

(その地域で暮らしている人々は、その地方で代々受け継がれている伝統を取り除こうとはしないだろう。なぜなら彼らは祖先の暮らしぶりを心から尊敬しているからだ。)

私の授業では、この日本文を読み上げて、それをもとに生徒に英文を書かせています。その場で日本文を読み上げるのは、授業の中で decision making を体験させるためです。私はこの活動を Spontaneous English Writing と呼んでいます。

さまざまな活動をできる限り取り入れるよう心がけたとしても、授業というものは往々にして知識伝授が主になってしまいがちだと思います。そのような授業において、生徒に decision making させるプロセスを取り入れていくことは大変重要となってきます。20年以上、この Spontaneous English Writing を実践してきましたが、進学校の生徒であれ、そうでない生徒であれ、この活動をする、彼らはいきいきとした表情になります。生徒は読み上げられた日本文を自分も持っている限りの構文、語彙、文法などといった知識を総動員して真剣に英語に直そうとします。その際、どの構文・語彙を用いるか、主語の設定はどうするか、時制は何かなどといったさまざまな選択をするプロセスを体験するこ

とになります。その decision making のプロセスを体験することは、生徒にとって、たまたま刺激的でワクワクさせてくれるものであり楽しいものなのです。

生徒に書かせる英文を考える際に、留意すべきポイントがいくつかあります。

① 文の長さ

教授資料などでも重要表現を用いた例文が紹介されていますが、たいていの場合その例文は短いもので Spontaneous English Writing にふさわしい長さではありません。生徒のもつ挑戦したいというプラスの気持ちをうまく生かし育てていくためには、適切な負荷を与えてあげることが必要です。どの程度が適切なのかを見極めるのは難しいことですが、decision making できるといふ喜びからくる力の大きさと、生徒の成長したいという意欲を信じ、長めの英文を準備するほうが効果的です。

② 他の useful expression

ターゲットとする表現以外に3つか4つ程度の有用な表現を取り入れていくほうが、生徒の語彙力の増強にもつながっていきます。上記例文では pass down, from generation to generation, way of living, from the bottom of their hearts といった表現がそれに当たります。

③ 語彙

英作文させる際には、生徒が未習得の語彙も作成させる英文にできるだけ組み込むべきと考えております。そうすることで授業を通して生徒に辞書を引く習慣を根づかせ、その大切さに気づかせることができます。未習得の語彙を意図的に英作文に組み込むことで、語彙力の増強にもつながっていきます。

④ 別解

可能なら異なる構文を用いた別解や一部分でもパラフレーズした英文を教師が作成しておき、早く書き終えた生徒に対してその別解やパラフレーズに取り組みよう指示します。それによって、解答にかかる時間の個人差にも対応でき、生徒が時間を持て余したり時間不足に悩んだりといった状況も解消できます。これは生徒の授業に対する満足度の向上にもつながります。また、別解に取り組むことで、構文力・表現力・語彙力の増強に確実につながっていくことをあらかじめ伝えておくと、生徒の取り組む意欲も上がります。

⑤ 答えの確認

解答例の与え方にはさまざまな方法があると思います。私が行っているのは、生徒から1～2人のボランティアを募り(ボランティアが出ない場合は指名)作成した英文をその生徒に板書させ、それを添削する方法です。添削する際、英文を書くうえでのアドバイスや知っておくべき事柄などにも触れるようにしています。また、なるべく生徒の書いた英文を生かすことを意識しています。後でも述べますが、授業は自らの学びを意欲的に行っていくことのきっかけになるべきと考えております。そういった学びを行うきっかけを与えることが、この Spontaneous English Writing の目的の1つでもあります。生徒が英文を書くうえで自信を得て、英文を作る楽しさを実感していくために、書かれた英文をできるだけ生かすことを心がけているのです。その添削の後に、私が用意した別解を含む解答例をいくつか板書し、書き写させて解答例の英文も記憶させていきます。

⑥ 授業中に英作文を行う頻度

生徒が授業の中で行う活動のバランスや1レッスン50分という時間の制約などを考慮すると、教科書1ページに対して1～2回程度が適切だと考えています。比較的負荷の重い英作文の課題を毎時間、1年間通して授業の中で与えることで、教える側にも机間巡視の機会が多く与えられます。そのことによって、それぞれの生徒の到達度や悩んでいる点、つまづいている点などを確認できるようになってきます。机間巡視の中で誤りの指摘もでき、先生から直接アドバイスをいただいたという喜びや、さらに学んでいこうとする意欲を生徒に与えるきっかけにもなってきます。つまり、一部ではありますが個に応じた指導も可能になるのです。そのような机間巡視を繰り返していけば、40人クラスの場合、1年間で少なくとも4単位の授業で10回程度、2単位の授業では5回程度クラス全員に声をかけてアドバイスができます。1年間かけて毎時間行うことで、一斉授業の中での個別指導を実現できるのです。

3. 実際の授業の中で【その2】

コミュニケーション英語であれ英語表現であれ、生徒に暗記させ身につけさせたい英文や表現というものがあるはずで、それは、どのような教科書や

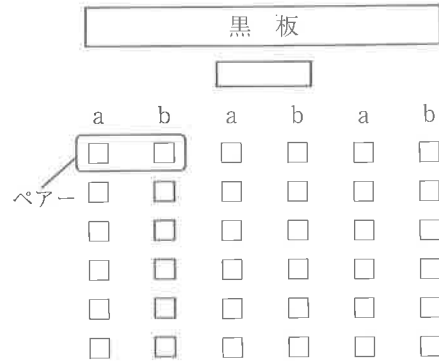
問題集を用いる場合にもあるものです。生徒がそのような英文や表現を主体的に意欲的に暗記するようになるために、私が意識して行っていることを述べさせていただきます。

POLESTAR English Communication II Lesson 5 のフレーズリーディング用のワークシートで説明します。このような教科書のワークシートを生徒に配布し暗記させるという場面で、生徒に記憶してもらいたい箇所をあらかじめ抽出しておき、下のように[A]と[B]の2つに均等に分けておきます。

英語	日本語
[A] against the U.S. government's treatment of Japanese-Americans,	米政府の日系アメリカ人に対する処遇に対して
[B] who were being held in internment camps.	彼らは強制収容所に入れられていた
In protest,	抗議のため
[B] he voluntarily entered such a camp himself.	彼は自らも進んでそのような収容所に入所した
As an artist, too,	芸術家としても
Isamu experienced rough times.	イサムはつらい時期を経験した
[A] He hoped to contribute to the designs	彼はデザインに貢献したいと思った

ここでは、against the U.S. government's treatment of Japanese-Americans, という箇所と He hoped to contribute to the designs という箇所を [A], who were being held in internment camps という箇所と he voluntarily entered such a camp himself という箇所を [B] と割り振っています。その割り振りを生徒に示した後、座席の列でグループ分けします。例えば6列の場合、a(縦1列目), b(縦2列目), a(縦3列目), b(縦4列目), a(縦5列目), b(縦6列目)という具合です。グループ分けの後、aグループは先ほど割り振った[A]の2箇所の英語を、bグループは[B]の2箇所の英語を指定時間内で覚えるように指示します。時間を区切ることで集中して記憶する訓練にもなります。与

える時間は英文の長さや生徒の到達度にもよりますが、この例の場合2箇所を記憶するのに30秒程度の時間を与えます。その後隣同士(1列目と2列目, 3列目と4列目, 5列目と6列目)でaとbのペアーを作らせます。



先にbグループが[A]の日本語を読み上げます。aグループはワークシートを伏せ、読み上げられた日本語をもとに、[A]の英語を答えます。aグループが[A]を2箇所とも終了すれば、交替してbグループが[B]の英語を答えます。それも終了すれば、今度はそれぞれのグループの担当箇所を変えます。その際、再び30秒程度の時間を与えて英語を覚えさせます。その後、同じ作業をa, bそれぞれのグループが行います。

このように重要表現を含む英文や節、句を覚えさせるタスクにおいて重要なのは、そのタスクを行った前後の違いを生徒に実感させることです。それによって、正しく記憶することの意義や重要性を認識させることができるのです。例えば、上記ワークシートの英文を含む教科書1ページ分程度の文章のシャドーイングを上記のペアーワークの前と後で行います。そうすることで、ペアーワークの前と後でのシャドーイングの完成度の差を、生徒自身に実感させることができます。この段階で生徒には英文を正しく記憶する重要性に関する気づきが生まれます。

授業をするうえで常に心を配っておかなければならない点は、生徒に気づきを与える授業を行えているのかどうかということであり、私たちは常にそのことを意識して授業を行うべきだと考えています。

4. ペアワークの意義

上記のペアワークでは、授業中に英語を発声する機会を増やすことができます。また正しく記憶できたかどうかのチェックをクラスメイトにしてもらうことで、正しく記憶せねばという意識も芽生えてきます。さらに、机間巡視を行う機会も増え、その結果生徒の到達度、取り組み状況、そしてときには友人関係を垣間見ることもできます。机間巡視では、英文を正確に記憶できなかったために、なかなか英文をうまく言えずにいる生徒に対し、ペアーがヒントを出して手助けする姿も目にします。これは手助けされた側だけではなく、手助けした側にも、自分自身の記憶の増強につながるというプラスの効果があります。

5. テスト問題の作成について

テスト問題を作成するうえで、教師はテストがただ単に習熟度を測るためだけにあるのではないということを中心にとどめておかなければなりません。これはテストに診断的側面と指導的側面の両方の性質があるからです。私自身、後者の指導的側面を忘れずにテスト問題を作成するように心がけております。

例えば、英文をしっかりと何度も読み込んで、自分のものにするように試験勉強をしてもらいたいと教師が思っているとします。その場合、そのような生徒の努力が報われる問題を作成し、試験に出題していくべきではないでしょうか。英文から単語を抜き出して、それが本来あるべき箇所を答えさせる問いで考えてみましょう。そのような問題では、出来上がった英文が不自然だと、試験前に何度も読み込んでいなくても正解できてしまいます。この形式の問題では、英文をしっかりと読み込んでおかなければ時間内に答えられない箇所から抜き出すことで、教師の思いを生徒に伝えられます。そうすることで、そのような試験問題に答えられるような勉強をすることの重要性を生徒が認識していきます。

大切なのは、そのような教師の思いを反映させた問題を1回の定期考査の出題で終わらせるのではなく、1年間通して一貫して出題していくことです。そのためには同じ学年の生徒を教えている先生方との話し合いや協力が不可欠となります。逆に言うとそのような指導的側面を意識した定期考査を継続していくと同僚との話し合いや意見交換、協調といっ

たことが自然と生まれてきます。また、生徒の学習に対する取り組みの変化を、ほかの先生方と共に実感することもできます。

6. 授業のリズムについて

4技能をバランスよく授業に組み込み、そのどこかに decision making させる過程を取り入れ、生徒に気づきを与えながら授業を行うことの重要性については、これまでに述べさせていただきました。それらを授業の根底に置きながら、小さな工夫を授業の中に取り入れていくことも大切です。

授業は1つの芸術作品であると私は常々考えております。その作品を魅力あるものにするために、授業を行うリズムは無視できない要素です。生徒にとって心地よいリズムになっているかどうかは、授業を成功させるうえで大切なポイントです。そのようなリズムを作り出すために私が意識しているのは、集中させる場面を随所に取り入れていくことです。

リスニングの取り組み方を例に、どのように工夫できるか考えてみましょう。リスニングでは、どこに focus を当てるかを明確にすることが大切になってきます。例えば、前もってポイントを示したり、さまざまな桁の数が出てくる音声で数に着目したり、カタカナ英語の発音・アクセント・綴りなどを取り上げたり、音のつながり・変化・消滅・ピッチ・抑揚などでリスニングの基礎に focus を当てたりすることができます。また、同様に focus を明確にしてディクテーションに取り組みせることもできます。上記のように工夫した活動を適切なタイミング、分量で行うことが大切です。

また、英文を記憶させるという点では、適切な長さ、難度の構文を含む5文程度の英文を、1文ずつ制限時間内で記憶させる場面を与えていくことも、集中を持続させ、授業によりリズムを作り出すうえで有効な方法です。そのように記憶させた英文や節句を次の授業の小テストの範囲として取り入れていくことで、授業後の自宅学習を促すことにもなります。(授業のリズム作りという話からはそれですが、小テストを効果的に実施するには、短時間でもテスト範囲の英文や表現などに授業で触れておくことが大切なポイントです。ただ範囲を設定して小テストを機械的に行うだけでは失敗に終わってしまいます。自宅学習を促す仕掛けを授業に組み込み、小テスト

に対する意欲を高めていくべきです。)

また、生徒が話を理解し咀嚼するために適切な間をとりながら話をしていくことも大切です。話すスピード・テンポに気を配り、生徒に適切な間(沈黙)を与えながら授業を行うということです。解説のスピードや、発問するタイミング、解答を求める際の生徒の指名のしかたや答えるための時間などについても、授業のよいリズム作りのために、生徒の習熟の度合いや能力を見極めたうえで適切に決めていく必要があります。

適度な緊張感を生徒に与えながら授業を行うことも、心地よいリズムを生むために大切だと考えています。授業中の話し方や言葉遣い、声の大きさ、ピッチ、トーン、表情や生徒への接し方などを変えることで、生徒が抱く緊張の度合いも異なってきます。どれくらい緊張しているかによって、その授業のもつリズムもずいぶん違ったものになってくるのです。

例えば、プリントなどを配布する方法も工夫できます。授業前にプリント類(授業で行う小テストなど)を列ごとに過不足ないように分けておき、導入としての greeting や small talk の後すぐにそのプリントを生徒に配布していきます。そうすることで時間の節約にもなり、緊張感を帯びたよいリズムで授業のスタートを切ることができるのです。上記の

ような工夫はほんのささいな一例にすぎませんが、そういったことを毎時間繰り返していくことで、よいリズムが生まれていくだけでなく教師の姿勢を生徒に伝えることもできます。こちらの姿勢や熱意を生徒に伝えていくことは、授業を成功させるうえで大切なことであると考えています。なぜなら、授業は生徒と共に作り出すものだと考えているからです。こちらが力を入れれば生徒はそれにこたえようとしますし、こちらが力を緩めれば生徒もそうになってしまうのです。

7. 最後に

授業を録音や録画して振り返ったり、ほかの先生方に見てもらい意見をいただいたりすることで、自らの授業を見つめ直すことができます。そこには教える側の気づきがいくつもあります。教える側の気づきを経て、学ぶ側の気づきが生まれる授業が私の理想です。授業を通して生徒と教師の両方にとっての多くの気づきが生まれ、授業の中での“学び”を通して、教師と生徒、生徒と生徒との間に、温かい人間関係が生まれていくことも私の大きな望みの1つです。

(県立高等学校教諭)